

文藝作品：

二人の老教授

Two Professors in Their Later Years

川 崎 清

1

「……皆さんは日本の未来、いや世界の未来をも背負って立つ人材なのです。是非本学で四年間勉強に励み、充実した大学生活を送ってください」

井戸尚義教授は入学式の学部長挨拶で演壇から新入生と保護者に語りかけた。自分のことばに酔っていた。学部長としての見識と威厳に満ちたスピーチだと自分で思っていた。同時に、井戸の胸中には、ここまで来るにはいろいろなことがあったという深い感慨が湧き上がって来るのだった。自分は人と争い、相手を蹴落とすようなことはしなかった、自分の人徳がこの地位にまで自分を引き上げてくれたのだ、という自負と自信で心が満たされていた。

2

井戸の世渡りは、一見すると、確かにうまいと言える面があった。しかし、その世渡り術は偶然の産物であり、井戸が苦勞して練り上げたものではなかった。三十代後半になって、処世の上で効果のある言葉を偶然見つけ出したに過ぎないものだった。以来、その言葉をことあるごとに口にして、言われた相手が気を良くし、井戸を好人物と誤解して信用してしまうのをうまく利用してきたのだ。相手の誤解と曲解、そして、それに付随する油断を誘うことで井戸はこの世を渡ってきたのである。

その魔法の言葉は「さすが」という語だった。大辞泉によると「評判や期待のとおり的事实を確認し、改めて感心する（以下略）」ときに使う語と定義されている。井戸はこの言葉をここぞという時に意識的に連発し、相手の言動に「改めて感心する」振りをして生きてきたのだ。

しかし、この魔法の言葉による世渡りも、最近ではうまくいかないことが多くなった。井戸があまりにも頻繁に「さすが」を使用するので、井戸が「さすが」と言っても、本心から感心してその言葉を口にしていないのではないことに気づいてしまう人物が出てきたのだ。その一人が英語学、言語学を専門とする川浪博教授だった。

2022年10月24日受理

3

川浪が、講堂で一年生全員二百八十名を対象に、日本語作文の基本を一人で教えているときのことだった。学生の反応を確認するために、川浪は講堂の左右と一番後方の席を見渡した。教員も講堂の左右の壁面に沿った席に座り、学生と一緒に講義を聴いていた。川浪が目を凝らすと、講堂の一番後方の席に学部長の井戸が座っているのが目に入った。しかし、その姿を見て、川浪は驚いた。井戸はスマホを左手に握りしめ、右手の指をすばやく動かしてメールかなにかをしているように見えたからだ。井戸はまた、体を左右にかすかに振ってもいた。その様子から判断すると、多分、耳にはイヤホンを装着していて、三味線か何かの音楽を聴いており、川浪の授業の声は勿論、周りの声も耳には入っていないのだろうと川浪は推測した。

授業を終えて、川浪は井戸学部長に声をかけた。

「井戸先生、私の授業はいかがでしたか。読書感想文の革新的な書き方を示したつもりなのですが」

井戸はすぐに答えた。

「いやー、さすがー、さすがです、川浪先生」

やや身をのけぞらして井戸はそう述べた。身をのけぞらす動作は、そうすると、いかにも感心したように見えることを井戸は経験的に知っていたからだった。

川浪は井戸の言葉を聞いて「またか」と思ったが、どうしても授業の効果を知りたかったので、無駄とは思いつつ、続けて言った。

「荒筋を長々と書くのではなく、まず強くひかれた個所を抜き書きさせる点を強調したのですが、その点を学生たちは理解していたでしょうか？」

井戸は実際には、川浪の授業を最初から最後までまったく聞いていなかったが、動じることなく次のように言った。

「いやー、さすがー。川浪先生にしかできない授業です。よく工夫されていて、感心しました。さすがですよ」

川浪は、自分の問いに具体的に答えていない、まったく無内容な井戸の感想を聞いて、もうそれ以上何も尋ねなかった。尋ねても無駄だと悟ったからだ。井戸の空虚な処世術の秘密を見た思いがしたのだ。

4

川浪と同様の経験をまだしていない教員や学生に対しては、井戸の魔法の言葉は依然として強い力を発揮していた。井戸はその強い効果を背景にして、「井戸流石^{りゅうせき}」などと自分で号し、しばしば次のような話を人前でしては、一人で悦に入っていた。

「人生は流れに身をまかせる石のように生きるのがよいのです。流れに身をまかせて流されていくうちに、角もとれて丸くなる。丸くなると人生もうまくいくようになるのですよ」

陳腐極まりない講釈なのだが、不思議なことに、人生に深く満足していそうな井戸の表情に

接していると、このような無内容な講釈でも、人々はどこかの高僧の話を聞いているような錯覚にとらわれるのだった。

また、井戸は「さすが」については、ネタを怠りなく仕込んでいた。

「転石苔を生ぜず、ということわざがありますな。しかし、私はむしろ、^{りゅうせき}流石苔を生ぜず、と言っているのです。流れに身をまかせる、つまり、人の争いには自分から入っていかないようにする、するとすな、苔は生じないのです。苔とは、この場合、人からの敵意や恨みですよ。流石のごとくに身を処していると、やたら人に恨まれたり、敵意をかったりしないのです」

このような話をする、井戸は確かにうまかった。そして、何故だかは分からないが、聞いている人間も、井戸の本質を喜んで誤解したのである。

5

井戸はニル・アドミラーリ (nil admirari) を信条としている、とうそぶくこともあった。この言葉は「何事にも心を動かされないこと」を意味するラテン語で、「超俗の人」という意味でも使われる言葉である。井戸がこの言葉を憶えて、それを使うようになったのには理由があった。それは大学院時代のことだった。同期の女子学生に恋情を抱き、気が散って、まともに本も読めなくなったのだ。そのことを指導教授から強く叱責されたのが理由だった。指導教授はこのラテン語を引用して、学問に打ち込む大学院生の心構えを厳しく井戸に諭した。その後、井戸はその恋情を断ち切るために、一か月ほど高輪にある高野山東京別院に通い、写経に没頭してみた。だが、人類の至宝とも言える尊い経文を写しても、その効果は顕著とは言えなかった。しかし、思いを寄せる女性が婚約したとの知らせが井戸の耳にも伝わってくると、諦めるようやっと自分に言いかけせることができたのだった。

以来、手の届かないものに心を動かされることがないように、ニル・アドミラーリという言葉の時々口にし、人の前でも話したりするようになった。人に聞かせるというよりも、むしろ自分に言いかけせるためであった。

井戸は、しかし、六十を過ぎても抑制のきかない俗情に日に幾度も支配されていた。その俗情とは異性への渴望だった。井戸はどこで聞いたのか、その煩惱を克服するヒントは真言密教の経文にあると信じるようになっていた。それで、高野山開祖の空海に学ぼうと思ひ立ち、真言宗関係の本を読み漁り、寺巡りもするようになった。御朱印帳を持って寺院をまわり、僧侶に経文を書いてもらいながら、その寺の本尊を拝んだりもしていた。けれども大学院時代に必死に励んだ写経にも目に見える効果がなかったのと同様に、真言宗の経文の勉強も、御朱印を集めることも、なぜか井戸の異性への渴望を鎮める効果はほとんどなかった。井戸は大いに迷い、悩んだが、その様子を表には出さないようにして暮らした。寺も八十ほど巡っていた。

6

煩悩を断てないことに悩み、寺社仏閣を訪れるようになって、数年が経過した冬のある日、井戸は都内某所の寺を訪れていた。その寺には、本堂に向かう途中に百余りの羅漢像があった。大きな像ではなく、一体が体長三十センチほどの像で、それが隙間なく縦横に並んで参拝者を迎える形になっていた。目黒にある有名な五百羅漢寺とは違い、狭小な境内に羅漢様が窮屈そうに押し合うように立ち並んでいるのだ。井戸は小さな山門をくぐり抜け、数歩進んだところで、羅漢像を眺めようと、像が立ち並ぶ方角に視線を向けた。その瞬間、はっとして足を止めた。見覚えのある人間を見たような気がしたのだ。見極めようと目に力を込めて、もう一度、その人物を見ると、それは川浪教授であった。

川浪は井戸水の入った手桶に手を入れて布に水を浸み込ませ、素手で羅漢像を洗っていた。丁寧に一体ずつ足元から頭まで布でぬぐい、しっかりと丁寧に洗っていた。十二月半ば過ぎなので、水はさぞや冷たいだろうと井戸にも察しがついた。井戸は我知らず身震いをした。川浪の手からは湯気が何本もの白い筋となって立ち昇り、吐く息も白くなって目に見えた。川浪が一途に仏道に帰依する真剣な姿がそこにはあった。

井戸はその場に立ち尽くして、しばらく川浪の後ろ姿を見ていた。川浪との出会いと、これまでの付き合いが思い返されてきた。川浪は自分と同年で、出身大学も同じだった。現任校への入職は川浪が数年早く、井戸が入職した当初はいろいろとその大学のしきたりを川浪に訊いて、こまごまと教えてもらったりした。そのような折には、川浪は実に親切だった。しかし、入職後十五年ほどがたち、学部長選挙になったとき、自分は過半数の票を得て学部長に選出されたが、川浪には一票も入らなかった。井戸は川浪を気の毒に思う一方で、所詮は自分より下の人間だと侮る気持ちを持ったことを思い出していた。

自分より下だと侮った、その川浪教授がいま一心に羅漢像を洗っていた。その姿に井戸は強く打たれた。自分は途方もない下劣な感情に支配されて日々濁った気持ちで生きているのに、川浪のいまの姿には神々しいまでの清らかさがあった。自分の信心の浅さと嘘っぽさを正直に認めざるを得ない瞬間であった。

川浪の姿に照らして我が身を振り返ってみれば、井戸が真言宗への信心を人に吹聴することも、数冊たまった御朱印帳を得意げに同僚に見せびらかすことも、ニル・アドミラリを実践していると称することも、すべては、自分がさも有徳の人であると周囲に思わせようと四苦八苦してただけと自覚させられるのだった。井戸は、いま川浪が無心に羅漢像を洗う姿を見て、自分の信仰心の偽物性を目の前に突き付けられたように思った。井戸はもはや山門をくぐり抜けた場所から、それ以上一步も境内の中に踏み入ることが出来なくなっていた。ほどなくして、井戸は川浪と羅漢像に背を向けて、音を立てないようにして山門を出た。正面を見据えて歩くことが出来なかった。下を向いて、やっと歩を進めて、来た道を引き返すのだった。

井戸は偶然川浪に寺で出くわして以来、御朱印をもらうために寺社に出向くことが怖くなってしまった。自分が行く寺に、また川浪がいるはずがないのは分かっていたが、どうしても行

けなくなってしまうのだ。それほど井戸の精神の傷は深かった。自分で自分の醜さ、嘘っぽさに堪えられなくなっていた。井戸は寺社巡り以外の救いの手段を探さねばならなかった。

7

川浪と出会ってから二ヵ月後、井戸は自宅で気もそぞろに運送業者の配達を待っていた。ネットオークションで購入した仏像が届くのだ。木彫りの十一面千手観音菩薩像である。落札価格は二十五万円だった。岡山県の古刹から出た逸品とのことで、オークションでの開始価格は十七万円だった。価格はその後十九万、二十一万、二十三万と上がり、井戸は入札開始日から三日目に二十五万の値を付けた。それが最高価格となり、落札したのだった。

井戸は届いた仏像の梱包を解いて、中の仏像を取り出した。天然木から手彫りしたもので、台座から頭頂までで四十一センチ、体長が二十九センチの十一面千手観音菩薩像だった。均整のとれた胴体の上に、顔が五段に分けて彫られており、首の上には、胴体と釣り合った大きさの正面を向いた顔と左右を向いた三つの顔があり、その上にやや小ぶりの三つの顔が彫られていた。更に、その上に三つの顔、そしてその上に、また顔が一つずつ二段になって彫られていた。どのお顔も実に穏やかで、上品な笑みをたたえていた。井戸はうっとりとした時のたつのも忘れて見とれていた。二十五万の出費にいささかも悔いはなかった。

これが井戸の仏像購入中毒の発端だった。購入方法がネットオークションというのも傷口を大きくすることになった。井戸は自室の机の上にあるコンピュータ画面上で、仏像の競売に参加して、結局は、極めて高額な九体の仏像を購入したからだ。弥勒菩薩像、不動明王像、大日如来像、薬師如来像、四天王像、どれも七十万円以上の買い物となった。購入の時点では、これほどの散財をしているとは、井戸の妻もまったく知らないことだった。

8

家族が井戸の精神の異変を疑ったのは、八体目の広目天像が配送されたときだった。これまでの購入品も、どれも体調が四十センチほどの仏像だが、配送の梱包はしっかりとした木枠に入れられているので、小家族用の冷蔵庫ほどの大きさになる。それがもう八つも届いたからだ。

井戸は資産家の息子であり、相続した資産も相当なものだったから、これしきの買い物で家計が逼迫すると騒ぐほどのことはなかったが、やはり常軌を逸し始めていた。

広目天像が配送された日に、井戸は妻からさんざん文句を言われ、競売に関する注意も受けた。しかし、その日から三日後の午前十時過ぎには、井戸は自室のコンピュータ上の仏像競売画面を見て、如意輪観音菩薩坐像を二百八十万で落札していたのだった。ちょうどその競売が落ち着いたとき、井戸の妻が井戸の部屋に走り込んできた。大学からの電話だという。今日は大学の入学試験日で、責任者である学部長の井戸が出席していないので、入試関係者がとても困惑しているとのことだった。

井戸は、結局、入試業務をスッポかすことになった。そのスッポかし事件の三日後、井戸は茨

城県鹿島にある精神科クリニックの一室で、ベッドの上に身を横たえて、静かにまどろんでいた。井戸の妻が夫の様子がおかしいと心配し、川浪教授にも相談をした上で、必死に夫を説得して、精神科を受診させた結果であった。精神科医の診断では、井戸は基本的には「自己愛性パーソナリティ障害」であり、その影響で「買物依存症」を併発しているとのことだった。「自己愛性パーソナリティ障害」については、川浪も井戸の妻も、初めて耳にする病名だった。医師の説明では、その障害を持つ人は「常に自分の能力を過大評価し、しばしば自慢げに自分の所有物を見せびらかし、見栄を張っていて、自分は褒められて当然であると思い込んでおり、賞賛が得られない場合は不機嫌になり、普段は自分の成功や権力、女性であればその美しさ、理想的な恋愛などについて空想にふけている」とのことだった。説明の言葉は、まさに井戸の性格そのものを言い当てていた。大学には、井戸の妻から休職願が出され、受理されていた。

9

井戸がそのクリニックに入院して一か月ほどたったとき、女性患者が入院してきた。病棟は男女別棟になっているので、実際に廊下で出会うまでは、井戸はその患者のことが気にならなかった。しかし、出会ってその顔を見ると、見覚えのある顔だった。どこで会ったのかと思ひめぐらすうちに、テレビで話題となっている衆議院議員の須藤まゆみ議員だと思い出した。テレビ報道では、須藤議員は政策秘書に暴言と暴行を繰り返し、たまりかねた秘書が、その暴言を録音して週刊誌に持ち込み、それが記事となりテレビでも報道され、その暴虐非道ぶりが全国津々浦々の国民の知るところとなったのだった。

テレビでは、録音テープが再生された。その暴言は「このハゲー、バカー。お前なんか生きる価値ねーだろ、死んじまえー」という調子で延々と続き、聞くに堪えない内容だった。人権無視も甚だしく、国民の代表とはとても思えない著しく品位を欠くものだった。

テレビでは衆議院で質問する際の須藤議員の極めて女性らしい、しとやかな所作や声音も放映された。更にそれと対比する形で、乗用車を運転中の政策秘書に怒鳴り散らす須藤議員の罵声と、こぶしで秘書を殴りつける音が再生されたのだ。その狂乱猛女ぶりには驚くべき迫力があつた。井戸は、しかし、その落差に不思議と心惹かれるのだった。井戸には幼いころから猛々しい女性に惹かれる性癖があつたからである。

井戸はその猛々しい須藤まゆみと同じクリニックに入院している事実をととても幸運に感じ、体の芯に熱い感覚が湧き起こっていることに気がついた。同時に、井戸は小学校三年生だった初夏のある日の出来事を思い出していた。

10

井戸少年は一人でテニスのゴムボールでボール投げ遊びをしていた。家の近くにある駐車場の壁にボールを投げて、跳ね返ってくるボールを捕る遊びだ。遊ぶうちに捕り損ねて、ボールが井戸の背後にある家の中に入ってしまった。ボールを探そうとその家に近寄ったが、その家の

まわりには、高さが一メートルほどのブロック塀があった。しかし、井戸少年は少しもためらうことなくその塀を乗り越えて、家の敷地内に降り立った。丁度そこは園芸用の庭になっていた。ダリアやデイジーが等間隔に整然と植えられていた。井戸はそれらの花や植物にはまったく注意を払うことなく、ボールの行方をあちこち探し回った。子供の無頓着さを遺憾なく発揮したのだ。その結果、その屋の主人が丹精を込めて栽培していただろうダリアの茎もデイジーの花々も、そして高価と思われる園芸用植物も、無残に踏みつけられて折れてしまった。

ほどなくして、庭の物音に気づいたその家の主人が家から出てきた。三十を少し超えた女性だった。踏み倒された植木や花を目の当たりにして、女主人は息を呑み、真っ青な顔になった。次の瞬間、ボールを握りしめて、そこに立っている井戸少年が犯人だと悟ると、この世のものとも思えない恐ろしい声を出して「こらー、なんてことするのー、このバカー」と怒鳴りつけた。女主人はつかつかと井戸に歩み寄り、井戸を両手で掴み上げ、一気に家の縁側に引っ張って行った。女主人はどっかと縁側に腰を下ろすと、井戸を抱え上げ、うつぶせにして物を置くように膝の上に乘せた。そして、いきなり井戸のズボンと下着を一気に膝まで引き擦り下ろして尻を剥き出しにした。

井戸少年はその女の動作の勢いと怒声に圧倒されて、手足をばたつかせることもできず、されるままになっていた。するとすぐに、バシッ、バシッとすさまじい音を立てて、女の素手が井戸の尻をたたいた。「このバカー、大事な植木を踏んづけて、どうしてくれんだー」。女はあらためて、どすの利いた罵声を浴びせてきた。また、井戸の尻を叩くにつれて、ますます興奮の度合いが高まったのか、大人の分別をすっかり忘れて、怒りに任せてあらんかぎりの力を込めて井戸の尻を叩いた。井戸の白い尻には女主人の手形が真っ赤なみみず脹れとなっていくつも残った。井戸はこのお仕置きのあまりの痛さに涙が出てきて、しまいには大きな泣き声をあげていた。随分と時間がたったように思われたとき、突然、女は井戸少年を膝から突き落として言った。「いいか、このバカがき、二度と庭に入るんじゃないよ。早く出ていけー、このバカー」

これが井戸の小学校三年次の思い出であった。この恐ろしい体験は決して忘れることのできない恥辱感を井戸の心に刻みつけた。しかし同時に、怒りという感情を通してであったが、女主人が自分に真剣に向き合ってくれたという思いが、井戸には不思議なほど心地よく感じられたのだった。というのも、井戸には病身の兄が一人いて、両親はその兄の世話に掛かりきりであり、井戸少年はいつも自分が両親に置き去りにされたような寂しさを感じていたからだった。膝の上に乘せられて尻を叩かれているとき、女がつけていた柑橘系の香水が井戸の鼻孔を刺激したが、そのにおいも井戸少年には忘れ難いものとなった。

クリニックには患者がくつろげるスペースとして十畳あまりの談話室が設けてあった。患者は個室にいることが多かったが、症状が軽くなった患者は談話室に出てきて、新聞を読んだり、テレビを視聴したりしていた。井戸は、須藤まゆみ議員が談話室に来ていないか、しばしば談

話室を覗くようになった。しかし、議員の姿が目に入ることはなかった。言うまでもなく、須藤議員は世間の目ばかりでなく、クリニック内の患者の目も避けていたのだ。

井戸の「猛々しい女性に惹かれる性癖」は幼い日の遠い記憶の中に封印されていたはずであった。しかし、テレビ放映でしか知らなかった須藤まゆみ議員の姿をクリニックで実際に目にするると、あの小学校三年次の記憶と共に、その痛覚や嗅覚で味わった、しびれるように心地よい感覚が井戸の心と体の中に鮮明によみがえってきた。

須藤議員が入院して十日ほどが過ぎた日の夕方、クリニックの菜園に井戸はいた。初夏の夕暮れは、都会なら暑気でむせかえり、じっとしていても大汗をかいてしまうのだが、茨城県鹿島の夕暮れは、風も涼やかに吹いて過ごしやすく、気持ちよかった。クリニックでは敷地内に菜園を造り、患者にプランターでキュウリやトマトの栽培をさせていた。植物の成長や変化に細やかに注意して育てさせると、患者の病んだ心が快方に向かうことが経験的に分かっていたからだ。

井戸はトマトを栽培していた。自分の担当プランターの前にしゃがみこんで、まだ青い小さなトマトをぼんやりと見ていた。すると、菜園に来たときには気が付かなかったが、五メートルほど先のキュウリを栽培するプランターの前に、須藤議員がしゃがんでいるのが目に入った。須藤議員はプランターにキュウリの株を植え込もうとしていた。議員はあまり興味を持っていないのか、長さ六十五センチのプランターにキュウリを二株そそくさと植えると、さっと立ち上がり、いまにもその場を立ち去ろうとしていた。井戸は、以前の講習で教えられて、その株には支柱を添えなければならぬことを知っていた。そのことを伝えようと、立ち去ろうとする議員に少し上ずった声で慌てて呼びかけた。

「あ、あの一、キユ、キュウリには支柱を添えなければいけないですよ」

須藤議員は突然の声に驚いて、立ち上がったまま静止して、井戸の方を振り向いた。

「お、驚かせてすみません。私もここに入院している者です。キユ、キュウリは弦を出しますから、弦が巻き付くための支柱を添えてやらなきゃいけないんです。講習で習ったんです」

井戸は場をとりなすために、急いで、しかし、努めて柔らかな声調と物腰で言った。

「ああ、そうでしたわね。講習で先生がそうおっしゃっていましたがわね。ちゃんと習ったはずなのに実行できないなんて……だらしがないですね、私って……」

須藤議員は最後まで言い切れずに、しばし、言葉を探しているように見えた。

「野菜の世話なんて、誰でも初めてでしょう。私も人に言われてやっとやれてるんです」

井戸は須藤議員がまだ一回しか返事をしていないのに、会話が何とか噛みあいそうだと思いき、嬉しくなった。

しかし、井戸が嬉しさを感じられたのもこの一瞬のみだ。次の瞬間、須藤議員がサッと井戸の方に大股で歩み寄り、右のこぶしを高く振り上げて、満身の力を込めて、井戸の左頬に振り下ろしたのだ。井戸はこぶしでもろに殴られて、体ごと吹っ飛んだ。痛みを感じる暇もなく、脳震盪を起こして、右体側からどっと地面に倒れこんだ。井戸のメガネははね飛び、井戸が目

開けたとき、ほとんど何も見えなかった。かすかな意識の中で、須藤議員の恐ろしい怒声が聞こえてきた。

「チーガーウーダロー、お前が須藤まゆみ様に^{さしず}指図するのー、このバカー、ド近眼野郎」

菜園の中で起こった異様な騒ぎを聞きつけて、男女の看護師が二人駆け込んできた。男の看護師は井戸の様子を確かめ、女性看護師は須藤議員を必死でなだめて、その場から議員を連れ出そうとした。須藤議員はなおも井戸にキックを喰らわそうと足を振り上げて構えたが、そこにもう一人男性看護師が駆けつけて、二人がかりで須藤議員を菜園から連れ出した。議員のいたあたりには、議員が若づくりのためにつけていた柑橘系香水の香りが初夏の夕風に運ばれてほのかにただよっていた。

12

この事件のことは、井戸が負傷したために、井戸の妻に即刻報告された。しかし、須藤議員との間で起きた出来事とは伝えられなかった。単に、院内での患者同士のいざこざに井戸が巻き込まれて負傷したとだけ伝えられていた。川浪も井戸の妻からその報告書を見せてもらったが、川浪にはその報告書に一つ腑に落ちない内容があった。末尾に、井戸はその院内でのいざこざで負傷して以来、かえって見違えるほど元気になったと書いてあったからだ。何故、負傷したのに、かえって元気になるのか不思議だった。井戸の妻も同じ疑問を持ったのか、事件の数日後に、何故かえって元気になったのか、その真相を医師に問いただしたようであった。そして、ほどなくして井戸の妻は離婚を決意したと川浪に伝えてきた。川浪には何がなんだか理解できなかった。それから一月半ほどたって、今度は、井戸からの手紙を川浪は受け取った。それには次のように井戸の現在の心境が綴られていた。

川浪 博 先生

お世話になっております。

また、この度は、私のことで学園関係者の皆さま、そして年来の友人である川浪先生に多大なご迷惑とご心配をおかけし、まことに申し訳なく思っております。深くお詫び申し上げます。

さて、私がクリニックに入院してはや三か月近くがたとうとしております。おかげさまで今ではだいぶ自分のことが分かるようになりました。この手紙を書けるのもその治療効果の表れだとお考えください。

この三か月近くの間、私はこれまでの自分の人生を顧みてまいりました。随分と^{はた}傍に迷惑をかけてしまったと色々と気づかされました。そして、その時々に関係した皆様を心の中で思い浮かべ、謝っております。そんな折、およそ二週間前ですが、妻から離婚を希望する旨をしたためた手紙を受け取りました。入院中の私にはすまないとは思いますが、退院してすぐに離婚の話を切り出すよりも、早いうちに自分の真意を伝えておくのがよいと判断したとのこと。私も、これまで家庭を顧みず、妻の労苦に思いをはせることもなく仕事をしてきましたので、ここで

妻を私から解放するのがせめてもの罪滅ぼしになると考え、了承する旨、返事を書いた次第です。

また、私は特に川浪先生にはお詫びしなければならないと思っております。私は自分の目が曇っていたために、川浪先生の高潔な人格を見ることができない時期があり、川浪先生が授業改善に真剣に取り組まれているときに、それに真摯に向き合うことなく、大変失礼な態度で接してしまったことを深く悔やみ、また恥じております。申し訳ありませんでした。

更に、この手紙に書くにはまだ早いのかもかもしれませんが、そして、妻との離婚協議がまだ完結しないうちに、もうそのようなことを考えているのかとお叱りを買うのは承知しておりますが、実は、このクリニックの女性入院患者の方と、もしかすると、新たな家庭を営むことになるかも知れないと考えております。まだ相手の女性には何も話しておりませんので、単なる私の妄想に終わる可能性も勿論あります。

相手の女性は感情の激発を抑えることができない方で、時に周囲に暴力を振ってしまう症状があります。それが原因で、その方も家族から離縁されたそうです。しかし、私には、その女性のその症状を受け止める“素質”のようなものがあるように思えるのです。彼女の感情の激発を受け止め、たとえ暴力を振られても、それに“心地よく耐えていく能力”が備わっている気がするのです。私と彼女とは、まさに「琴瑟相和す」の取り合わせとなると思うのです。

これまで私は自分の心の葛藤を解決するために、寺社を巡って御朱印をいただき、合わせて宗教思想とりわけ空海思想を勉強してまいりました。しかし、お察しの通り、私は空海から何も学ばませんでした。ただ難解な書物を集めたにすぎません。実際に目を通して読んだものも多少はあるのですが、一知半解にも至らないのが実情でした。それ故、私は空海を学び損ねて愚の塊になったという思いがいたします。その意味で、今後は「愚塊」と号するつもりです。

退院後は愚塊として、もう一度始めから空海思想を学び直していく所存です。川浪先生には今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

井戸 尚義

13

川浪は井戸の手紙を読み終わると目をつむり、しばし考えに耽った。井戸が入院加療して自己像をある程度正確に描けるようになり、かなり快方に向かっていることを川浪は感じた。自分を「愚塊」などと自称するのも、以前の井戸からは想像できないことだった。入院前は、空海を理解できるのは自分だけだと言わんばかりに、難解な書籍を研究室の書架に並べ、これ見よがしに見せびらかして、まさに「自己愛性パーソナリティ障害」の特徴を示していたのだった。一方、井戸が妻と離婚するにあたって、それは自分に責任があると述べていることには好感をもった。しかし、その舌の根も乾かぬうちに、もう次の結婚相手を見つけたように語っていることには驚き呆れるとともに、深い憐憫の情を禁じ得なかった。井戸の人生は、既に六十九歳に手が届くというのに、どこまで行っても学びのない人生なのか、といささか残念に思えたか

らだ。

川浪は手紙を受け取った翌日、入院先の井戸に宛てて、返事を簡潔にしたためた。医者 of 言うことをよく聞いて十分に養生すること、といった常識的なことのみを書いた。入院先での女性患者との交際については、敢えて意見を述べなかった。諫めたところで、どうせ聞く耳を持たないほどのほせあがっているのだと分かっていたからだ。川浪は返事の手紙を書き終えるとともに家を出て投函した。他人事ながら、侘しく虚しい思いが込み上げてくるのだった。

14

井戸の妻からも川浪は手紙を受け取った。それによると、妻は離婚をする前に、妻としての最後の義務を果たすために、クリニックの担当医を訪ねたとあった。井戸の入院継続に必要な書類をそろえて必要事項を記入し、手続きを済ませたり、院内での生活必需品をそろえて井戸に渡すように頼んだり、銀行の通帳やカード類をすべて分かるように仕分けてビジネスバッグに入れ、そのバッグの鍵と自宅の玄関の鍵を井戸に渡してもらうようにしたとのことだった。

更に担当医には、離婚に至るすべての経緯を伝えて、今後の井戸の治療の参考にしてもらおうつもりだったという。担当医の方でも井戸の現在の病状を隠さずに、妻である自分に伝えてくれて、妻が後顧の憂いなく、離婚後の新しい生活に入っていけるように、ある程度立ち入った内容を話してくれたとのことだった。その話の中には、井戸と須藤議員との出会いと、その出会い以来、井戸が議員に対して恋情を抱くようになったいきさつも含まれていた。担当医は、井戸夫婦の関係が、井戸と須藤議員との出会いよりずっと以前に、既に修復不可能なまでに壊れていたことを知っていたので、須藤議員とのことを話しても、もはや妻には痛くも痒くもないと考えたとのことだった。手紙のその部分を読んで、川浪もまた、須藤議員から被った負傷以来、井戸がかえって見違えるほど元気になったという事情が、やっと呑み込めたのだった。異性との理想的な恋愛を空想する「自己愛性パーソナリティ障害」特有の性癖がまだ直っていないと分かった瞬間だった。

15

井戸がクリニックを退院する日になった。春先に入院してから五か月が経ち、季節は初秋を迎えていた。身元引受人が必要というわけではなかったが、身寄りが一人もいなくなった井戸を気の毒に思い、川浪は井戸を迎えに鹿島まで出向いていた。

クリニックの玄関で待っていると、荷物でパンパンに膨れた大きな紙袋を両手に下げて、井戸がのそのそと覚束ない足取りで現れた。退院するというのに、かなり暗鬱な表情をしていた。見違えるほど元気になっていると思っていたので、怪訝に思いながら、川浪は努めて明るい調子で井戸に話しかけた。

「井戸先生、ようやく退院ですね。ご体調も戻られたようで、良かった」

「……ありがとう……川浪先生……わざわざ……来てくれて……」

井戸は、川浪の顔をちらっと見た後^{あと}は下を向いたまま、とぎれとぎれに言葉を吐いて、型通りのあいさつを済ませると黙ってしまった。

「井戸先生、家に戻られたら、とりあえず家事代行業者に電話を入れてみましょう。まだ、炊事や洗濯を一人でこなすのは無理でしょうから」

川浪は、井戸に家事能力がまったくないことを知っていたので、提案してみた。

「あー、そうですね。家に戻ると、炊事や洗濯をすることになるんですねー。気が付かなかったな。さすが、さすがですねー、川浪先生は。うーん、あと掃除も自分でするんですねー。うーん、これなら、入院しての方が楽だったなー」

この暢気とも磊落とも取れる発言を聞いて、川浪は井戸の妻が感じていた絶望の深さを理解した。井戸の物心両面の生活を支えるために、家人がどんなに苦勞をしても、井戸には苦勞をしている人の気持ちや支える労働の重さを理解する想像力がまったくないのだ。家人は自分の生活を支えるためにそこにいる、いて当然と思ひ、それ以上思いを巡らせることがないのだ。井戸が二年後に定年になり、家にずっといるようになると、妻は井戸の家政婦として毎日暮らすだけとなってしまい、そのことに、もはや耐えられないと思ったのだろう。川浪はそんなことを思わざるを得なかった。ややあって、井戸が独り言をいうように突然しゃべり始めた。

「あー、おととい、入院している例の女性に自分の気持ちを伝えたいですよ。退院したら結婚しようって……でも、だめでした。顔を見るのも、声を聞くのも嫌で耐えられない。大っ嫌い、早く目の前から消えてー、なんて言われちゃって。でも、僕は諦めない、諦めるもんか」

川浪はこの言葉を聞くと、井戸を迎えに鹿島まで出向いたことを深く後悔した。今日、川浪がわざわざ鹿島まで迎えに来た心身両面の苦勞に思いをいたす想像力も、やはり、井戸に期待することは無駄だと分かったからだ。また、結婚などとタワケタことを言っているけれども、井戸は何のために女性と再び所帯を持つようとしているのか、川浪にはまったく理解できなかった。でも、多分、自分の面倒をすべてみさせるためなのか、と推測はついた。要するに、井戸の精神世界には、生活を構成する日常的労働のことはまったく入っていないのだ。炊事も洗濯も清掃も、それは誰かがやってくれることで、自分は一切それらには関りがなく、何もしないでいいと思っているのだ。川浪は井戸を蔑んでいいのか憐れむべきなのか、分からなくなった。川浪は、人生の悦びは、家庭であれ、勤め先であれ、雑用を含む様々な日常的労働を分担して遂行し、互いを支え合い、互いをいたわり合って、感謝することから生まれるものと思っていたからだ。井戸にはそういう発想がまったくないようだった。

最寄り駅に着いて、電車に乗り込んでからは、川浪はわざわざ苦勞して井戸に話題を振ることをやめ、むっつりと黙り込み、暗鬱な気持ちで井戸の自宅まで井戸を送り届けた。井戸が玄関の鍵を開けて、自宅に入っていく背中を見ながら、川浪は井戸のこれからの人生に思いを巡らせた。孤立無援の中で、井戸は日常生活の様々な労働をこなすスキルを一切持たないまま、まずは一人で身辺を整えて、後期の授業の準備をし、職業人生の最終盤^{けが}を汚さないように過ごさなければならないのだ。それが井戸にはできるのだろうか。川浪は井戸の人生の行く末を思

い、暗澹とした思いに沈んでいった。

16

井戸が大学に復帰して一か月が経過したとき、井戸が急性心筋梗塞を発症し、研究室内で倒れたという知らせが学内連絡網を通して午後七時に川浪にもたらされた。川浪が急いで井戸が救急搬送された病院に駆けつけると、既に、大学の石田正^{いしただだし}事務長が来ていた。今、井戸は緊急手術を終えたばかりで、これから手術室からICUに移されるとのことだった。井戸がベッドに横たえられて手術室から出て来たが、その体には、点滴やその他の薬液を体内に入れるチューブが何本もつけられていた。一緒に出て来た執刀医から話を聞くと、三本ある心臓冠動脈の二本に血栓が詰まって血流が止まり、時間がかかり経過していたため、心臓の前壁がほぼ全部梗塞してしまい、心臓が血液を送り出すことがほとんどできなくなっているとのことだった。命を取り留めるかは何とも言えない段階で、今夜を乗り切れば何とかかなりそうだが、見通しは予断を許さないとのことだった。事務長は学長にその様子を知らせ、事後の対策をとるために大学に戻っていった。川浪はICUの外に並べられた長椅子に寝転んで一夜を明かすことにした。

病院が用意した毛布を掛けてまどろんでいると、医師と看護師が急ぎ足でやって来て、ICUに入って行った。慌ただしく動いている気配があったが、十五分ほどで一同が動きを止めたようだった。ややあって、先ほどの執刀医がICU「のドアを開けてゆっくりと出て来ると、川浪に告げた。「ご臨終です。この患者さんには身寄りの方がいないのでしたね。成年後見人はあなたですか、じゃー、中に入ってご臨終に立ち会ってください」

17

井戸が急逝し、葬儀の会場で川浪はお別れの言葉を述べていた。

「……井戸先生とお付き合いすることになって、二十年たちましたね。井戸先生は『さすが』という言葉が好きで、事あるごとに連発しました。私が、何を言っても、しても、いつも『さすが』と言って褒めてくれました。私以外の人に対しても、いつもそうでしたね。それは、井戸先生が他者に対して気を遣い、その人が気分よく過ごせるようにと配慮してくださったためだと現在は思っています……。

「一方、井戸先生は、学問には厳しく、真理に向き合うことには極めて真摯で、学生に媚びるために冗談などを言わない人でした。そのため、学生からの評価はときに『講義が単調だ』などと厳しいものがありました。しかし、学者として、教師として、そして学部長としても、手を抜くことなく職務に精励されて、大学の発展に大きな貢献をなさいました。総じて言えば、十分に充実した人生であったと思います。どうかこれからは、ゆっくりとお休みください」

川浪は井戸を精一杯褒めて、お別れの言葉を締めくくった。しかし、井戸を褒め過ぎたと思わざるを得なかった。だが、川浪は、自分の葬儀で誰かがお別れの言葉を述べることになったとしたら、その人物も今日の川浪と同じように、内容をかなり潤色しなくてはならない気がす

るのだった。人間は、多かれ少なかれ、潤色されたお別れの言葉に送られて、不帰の旅路につくのだと思った。だとすれば、誰かがお別れの言葉を述べるにしても、なるべく潤色の程度が度を越すことのないように、一日一日を真面目に生きていこうと、川浪は改めて気を引き締めた。井戸の死を看取って初めて、川浪は自分の老いをしみじみと感じ、老いと死にきちんと向き合うことの難しさと大切さを理解したのだった。

（了）